

岩手と青森の天理教

岩手県と青森県の天理教伝道を考えよう。

岩手は北海道に次いで広い面積をもつが、山地が多く低地は沿岸部と北上川に沿った地域のみで少ない。青森は旧南部領と津軽領の違いを認識する必要がある。

岩手県には教会が104カ所、青森県は186カ所ある。岩手は東北で山形に次いで少なく、一方青森は最も多い。しかも青森の教会数は2番目の秋田より40余りも多い。

岩手の教会を大教会系統ごとに分けると、梅谷大教会が23カ所と最も多く、次いで島ヶ原16カ所、小南部13カ所、城山7カ所である。梅谷、島ヶ原とも岩手から遠い。

京都府梅谷村の信仰が県境を越え、三重県伊賀地方に伝わり、そこの布教師が岩手県へ伝えた。また、島ヶ原も伊賀の布教師が岩手県へ伝えた。現在岩手の天理教のかなりが三重県からの伝道によっていることが分かる。

岩手県、梅谷系統の教会23カ所の全てが磐井分教会関係である。明治27年、三重県上野町の阿井出張所(現分教会)布教師奥谷金太郎は東北布教のため、岩手県一関で布教を始めた。まず病身の主婦2人が入信、続いて夫や親戚知人が入信するに及んで、明治28年に磐井出張所(現分教会)が設立された。

設立当時の信仰者は身上が助かった感謝の念が強く、ある人は教会設置の際、多額の献金をするため所有する田地を売却して充てたという。これを知った周辺住民は嫉妬の気持ちもあって「田売りたまえ…」の悪口ではやし立てた。一関近辺の町村に広まって現在磐井分教会は34カ所の教会を持つ。その大半23カ所が岩手県内で、他は北海道と宮城県である。

三重県、島ヶ原系上野出張所の布教師吉崎元吉は明治27年、岩手県盛岡で布教していた同じ上野出張所の城山竹蔵を応援するため岩手に赴いた。盛岡の南方、紫波郡不動村で神名流しをするうち、教えを聞き感服した人たちが入信した。明治28年紫波出張所が設立されたが、その後花巻でも信仰が盛んになり明治32年花巻出張所の設立に至った。なお、花巻は紫波の部内だったが後、周辺の島ヶ原信者を整理統合、紫波などの上級教会となった。現在全20カ所のうち岩手県内に16の教会がある。

その他岩手県北部に小南部大教会関係が13カ所ある。青森県八戸に始まった小南部支教会からの伝道で県境を越え南下したものと秋田県へ伝わった小南部系が岩手へはいったものがある。九戸、二戸の教会はほとんどが小南部系統で占められている。また、城山などの山名系と沼津を含む嶽東系の教会も県内にそれぞれ10カ所を越す教会を有している。

青森の話に移る。最初に書いた通り、青森県は教会本部から遠方であるにも拘わらず東北で最も教会が多い。大教会も津軽と小南部があり、これも東北では一番である。さらによぶく数が東北でダントツに多い。総じて青森の天理教は元気があると言える。しかしなぜそうなったのだろう、大変興味深い。

明治28年8月嶽東系北豆出張所の布教師室伏安兵衛、かの夫婦は岩手県沼宮内を経て八戸に着き、僅かの間に300戸ほどの信者を得た。かのの弟山本安太郎夫婦も共に布教し、八戸周辺の町や村に、さらに岩手県、秋田県にも伝えられた。

安兵衛たちに助けられた信者たちの純朴な信仰は、上級教会ふしんのお供えに財産を蕩尽する人が続出したという。明治31年小南部出張所(現大教会)が設立されるが、布教開始か

ら5年間で現在の小南部大教会の基礎が築かれたという。

青森県の旧南部藩領である八戸を中心に県東部および岩手県北部である九戸や二戸は軒並み小南部系統の教会である。青森県にある小南部系教会は全部で52カ所であるが中でも山本夫妻が丹精したといわれる五戸分教会が県内に32カ所もの教会を有している。

県東部の大半が小南部系であるのに対し、中、西部は津軽、城山、山名系統の教会が多い。津軽大教会の発端から述べよう。

三重県津支教会(現大教会)の久保繁蔵ら5人の布教師は青森が布教有望地だと聞き、明治27年弘前の土を踏んだ。5人は津軽方言に苦労しながら産後の患いで伏せていた婦人を助けた。感激した婦人は自らも人を助けようと弘前病院の患者に声をかけ、結核の人を布教師と共に助けた。さらに助けられた人が葛西亦蔵(後の津軽大教会長)に天理教を伝えることになる。

大袋(現田舎館)の旧家に育った葛西はいくつもの病いを持つ身だったが、久保繁蔵が10日間おさづけを取り次ぐと鮮やかに治癒した。旧家の長男が神様に助けられたと評判になり、救いを求める人たちが葛西の家に群がった。「生涯、人を助けよう」と心定めをした葛西は病人のために夢中で祈った。まだおさづけ人ではなかったが、拝めば助かるという親神様の働きに自分が驚いた。病人たちと共にいんねん果たしの求道生活を送り、みんなの信頼を得ていった。

明治29年、葛西亦蔵を会長に津軽出張所(現大教会)が設立され、弘前市内や周辺の黒石、水元などに広まっていく。現在、津軽系教会は青森県に45カ所あり、そのほとんどが県中部、西部である。

青森県には城山系教会が37、山名系教会が19、合わせて56カ所ある。これは静岡県から来た2人の布教師の伝道による。山名系東北伝道の打ち出しで、城山支教会(現大教会)の名倉千代蔵と加藤孫吉は紹介を受けた寺田金太郎の住む岩手県盛岡に赴いた。盛岡は仏教が強く苦戦するが2人の不思議なおたすけが続き、明治28年には盛岡出張所が設立された。

寺田は2人のおたすけを目の当たりにし、妻の実家、青森県小湊もぜひ布教してほしいと懇願した。相談の結果、加藤は盛岡に残り、名倉が小湊に行くことにした。そこで長く難病に苦しんでいた太田丹五郎を助けた。親神の不思議で鮮やかな働きに感激した太田は猛烈なおたすけを開始する。太田はその後何度となく病をぶり返したがそのつど病を肥となし励みとした。

太田は小湊から当時青森一の都会であった弘前に出、五所川原へも足を伸ばした。太田の奮闘あって明治28年12月弘前出張所(現分教会、山名部内)ができ、五所川原、浪岡などにも伸びて行く。現在、弘前分教会には22カ所の教会があり、うち19カ所が青森県の津軽地方にある。五所川原、浪岡などは城山所属の教会になっている。

明治20年代、天理教が日本中に広まる過程で不思議なおたすけが相次いだ。医者では治らない難病がおさづけで治った。青森県でも室伏かのが瀕死のハンセン病患者を助けたり、葛西亦蔵や太田丹五郎のおたすけはまさに奇蹟であった。この時代、日本中至る所でこのような事象が報告されている。この現象をどのように考えたらいいのだろうか。布教師の真剣なおたすけに神様が後押しして下さったと考えるべきではなかろうか。